

日に2万1千株生産

近畿の底ぢから

一口かじると、シャキッとした歯ごたえに驚く。京都市のスプレッドが送り出す「ベジタス」ブランドのリーフレタスは、人工の光で育てられた工場野菜だ。現在の生産規模は、1日に2万1千株と国内最大。来年には、さらに大きな工場の建設もめざしている。



スプレッドの工場の内部。レタスは現在40日余りで出荷している＝京都市府亀岡市、スプレッド提供

ずらりと並ぶのは、葉っぱが外に開く「リーフレタス」約80万株。蛍光灯に照らされた鮮やかな緑が目にあぶしい。京都市府亀岡市にあるスプレッドの亀岡プラントは、単一の野菜工場と

ばが外に開く「リーフレタス」約80万株。蛍光灯に照らされた鮮やかな緑が目にあぶしい。京都市府亀岡市にあるスプレッドの亀岡プラントは、単一の野菜工場と

スプレッド 本社・京都市。2006年に設立し、07年に亀岡プラント(京都市府亀岡市)でレタスの大量生産を始めた。現在の生産高は年間約770万株、売上高は約8億円(16年3月期)。17年には、けいはんな学研都市に日産3万株の新工場を建設する計画だ。

試行錯誤し環境管理確立

工場野菜栽培「スプレッド」



⑤ 野菜工場の前に立つスプレッドの稲田信一社長
④ スプレッドの野菜は「ベジタス」ブランドで販売。フリルレタスなど4種類を展開している



が少ない味だ。光、温度、二酸化炭素、風、養液の成分など50以上の指標をみながら生育環境を整え、一般的な野菜工場より1週間ほど長い40日余りの期間をかけて育てる。与えた養分が甘みが変わるのを待たない。「消費者が選ぶのは、やはり味ですから」と稲田信一社長(56)。

設立は2006年。野菜卸売市場の間を取り持つ流通会社「トレード」グループを経営していた稲田社長が、新事業として立ち上げた。頭の中にあっただのは、農業の後継者不足への懸念だ。「このままでは卸売市場の将来も見えない」

まずは兵庫県内のマンションの一室で栽培実験を繰り返した。レタスに最適な明・暗期のバランスや温度などを研究。約1年かけ、人工光で作るのは難しいとされていた玉レタスの生産にも成功した。

採算を考慮し、作りやすいリーフレタスを選択。07年に工場での生産を開始した。ところが、苗の段階で異変に気づく。思ったように育たないのだ。広い工場の栽培環境を管理する難しさは、マンションの一室とは別次元だった。温度ひと

つとつても場所によってバラバラ。「今考えると本当に甘かったですよ」

新たな試行錯誤が始まった。たとえば風が流れるよう、工場内にファンをつける。すると別のところで空気が滞留し、育ちが悪くなる。そんな課題をひとつずつ、つぶしていった。

栽培環境を整えるまでに約2年。1日あたりの生産量を高めて黒字化するまでには、さらに4年ほどかかった。

販路も着実に広がってきた。営業部隊が小売店で売り場づくりを手伝ったり、試食コーナーを設けた。少ない注文でも新鮮な状態で確実に届け、売れる側のニーズに応えた。今では取引先は首都圏や関西のスーパ―など約2千店に広がる。次に挑戦するのは、さらなる規模の拡大だ。来秋には京都市府木津川市に日産3万株の新工場をつくる。収穫などの作業を機械化してコストを圧縮した最新式のシステムを導入する予定で、世界中の企業から問い合わせが寄せられている。

稲田社長は「野菜工場の技術は飛躍的に伸びている。農業の可能性をもっと広げ、さらに多くの人を巻き込んでいきたい」と話す。(西村宏治)